

遥かなる東海道

～ 富士・沼津・三島の記録 ～



私ども富士・沼津・三島三市博物館連絡協議会は、平成9年に第1回共同企画展「目いっぱい!腹いっぱい!東海道」を開催してから今回の企画展で11回を数えます。

今回は再び東海道をテーマとして取り上げ、それぞれの宿場はもとより、静岡県内の街道名物を紹介します。また本年は江戸時代に日朝両国間の平和の礎となった朝鮮通信使が派遣されてから400年を迎えるということで、東海道を通った朝鮮通信使の様子についてもあわせて紹介していきます。

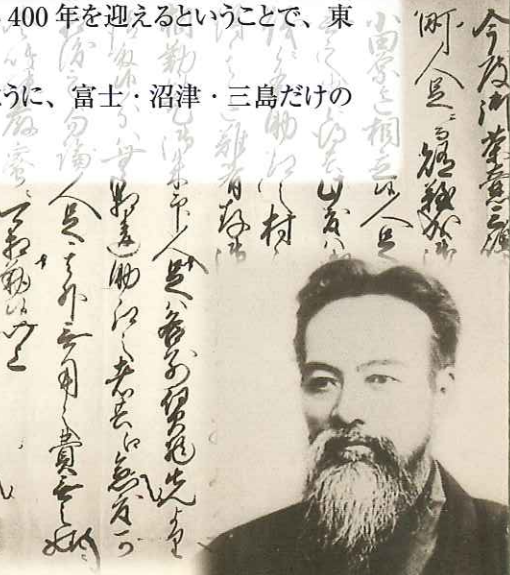
この企画展が「信(よしみ)を通わせる」という朝鮮通信使の精神に見られるように、富士・沼津・三島だけの交流にとどまらず、広く日韓善隣友好の一助となれば幸いです。

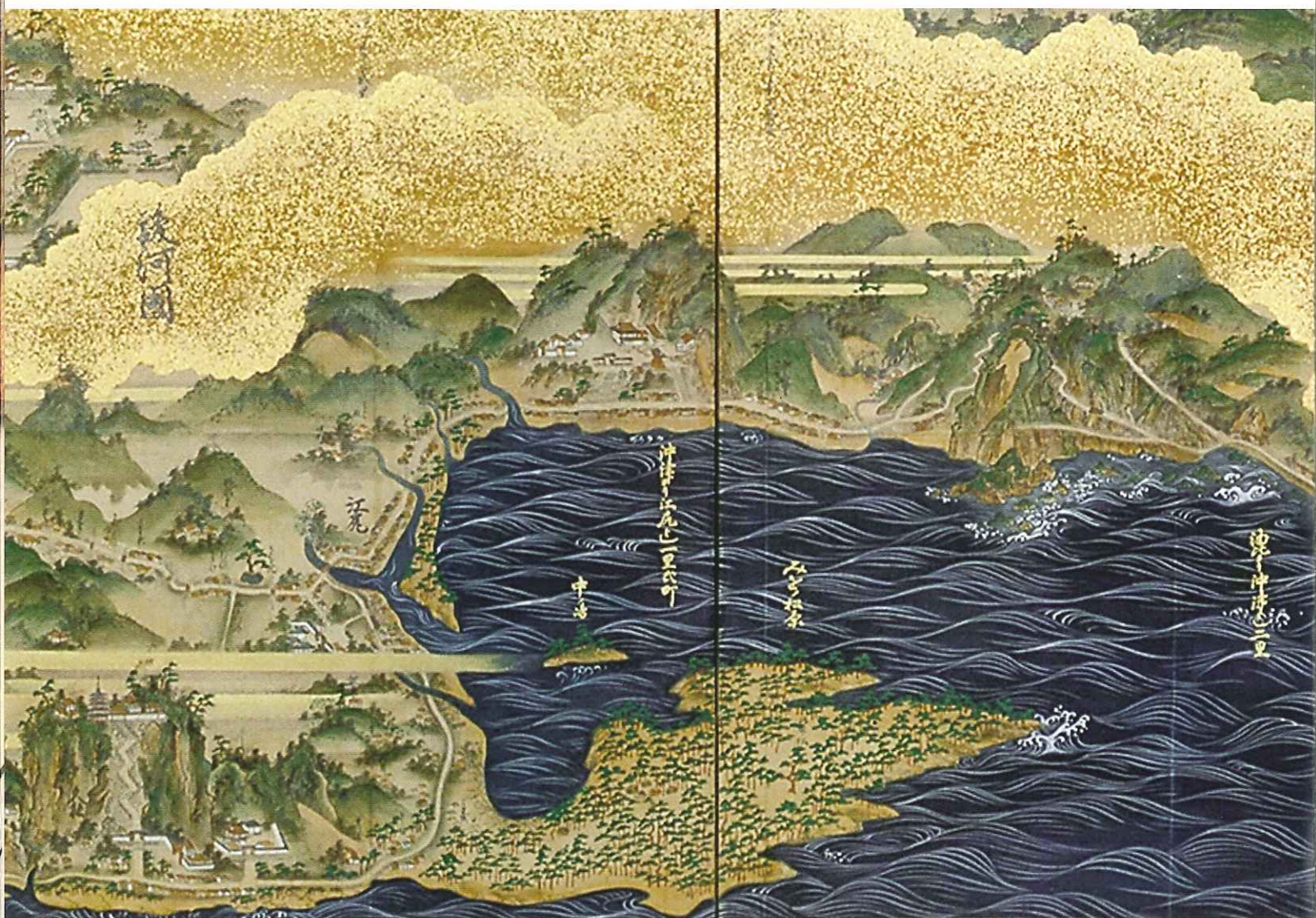
沼津市歴史民俗資料館
平成19年7月7日(土)～9月30日(日)

富士市立博物館
平成19年10月6日(土)～12月2日(日)

三島市郷土資料館
平成19年12月9日(日)～平成20年2月24日(日)

巡回予定





吉原宿

慶長6年(1601)、徳川家康より「伝馬朱印状」が与えられ、吉原は東海道の宿場として成立しました。当時の吉原宿は、駿河湾に程近い現在の富士市今井・鈴川の地区に位置していました(元吉原宿)が、その地理的条件から高波や漂砂の被害をたびたび受けたといわれています。そのため、寛永年間(1624~1643)に従来の場所より北西へ2kmほど離れた場所(中吉原宿)へと所替を行いました。しかし、その場所も延宝8年(1680)閏8月6日(今の9月28日)、東海地方を襲った江戸時代最大級の台風による高潮によって、甚大な被害を受けたことにより、天和年間(1681~1683)にさらに北西の場所へと二度目の所替を行いました。これが新吉原宿で、現在の吉原商店街の位置にあたります。

ようやく定着することのできる場所に宿場が設置され、これ以降、吉原宿は東海道の宿駅として発達していくこととなりました。

天保14年(1843)の『東海道宿村大概帳』によると、総戸数653戸のうち、本陣は2軒、脇本陣は3軒、旅籠は60軒を数え、人口は2,832名にのぼったとされています。

また、宿場の移転により、吉原宿周辺の東海道は大きく経路を変えることとなりました。その結果、江戸から京都へ向かう場合、常に右側に見えていた富士山が左側にみえる場所が生まれました。その場所は左富士と呼ばれ、東海道の名勝として親しまれています。



「東海道五拾三次之内 吉原(左富士)」歌川広重画(富士市立博物館蔵)



大正時代の左富士(富士市立博物館蔵)



原宿

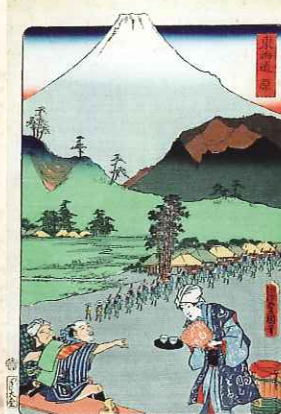
西は富士川扇状地の東端から、また東は黄瀬川扇状地の西端までを、浮島が原といいます。田子の浦に沿って、吉原から間宿柏原をへて原宿へ至るまでの東海道の風景は、街道随一ともたわれました。古くは源平盛衰記（文治元年1185）にも「～浮島が原に着きぬ。北は富士のたかね也。東西に長沼あり。山の緑陰を浸して、雲水も一つ也～」と書かれています。街道から浮島が原を見下ろし、たなびく雲の上に愛鷹山と富士のそびえる独特の風景は、現代でもみられます。

東海道原宿は、慶長6年（1601）に宿駅として成立しましたが、それ以前からも戦記物や旅行記にその名が見られました。天保14年（1843）の『東海道宿村大概帳』によると、戸数は398戸の内、本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠25軒。人口は1,939人あり、県内22宿中では4～5番目に小さな宿場でした。

しかし原には、松蔭寺に白隠禅師（貞亨2年1685～明和5年1768）という名僧がありました。生涯松蔭寺の住職として因果応報を説き、多くの禅画や墨蹟をあらわしました。この白隠に会いに原宿へ豪農や各地の大名が訪れ、文化交流の場となっていきました。



「東海道十四 五十三次 原」
 【隸書東海道】初代歌川広重画
 （望月宏充氏蔵）



「東海道 原」
 【御上洛東海道】三代歌川豊国画
 （望月宏充氏蔵）



沼津宿

伊豆半島天城山から北へ向かって流れ出た狩野川は、沼津宿の手前で黄瀬川と合流して向きを変え、蛇行して南の駿河湾へと注ぎます。富士隠れの地とはいえ、旅人が狩野川の河口に近付くにつれて、愛鷹山の後ろに富士がそびえ、宿場を見下ろします。元禄元年2月（1688）の沼津宿絵図には、この川に沿って鍵型に折れた東海道と、そこに広がる宿場が見られます。

この頃の沼津に城はなく、絵図にも古城と書かれています。天正5年（1577）、この場所に武田勝頼が軍事上の拠点として築いた三枚橋城は、徳川家康による天下統一の14年後には廃城となります。再びこの地が城下町となったのは、安永6年（1777）に水野忠友が幕府側用人として沼津城主に命ぜられてからでした。

時代は下り、天保14年（1843）の『東海道宿村大概帳』によると、この頃の沼津宿の戸数は1,234戸。その内、本陣3軒、脇本陣1軒、旅籠55軒。人口は5,346人あり、沼津城周辺には武家屋敷も並びました。宿場は旅人だけでなく、ここに住む武士たちの生活を支えることで、さらに発展していったのです。



「東海道名所之内 田子浦蛇松」
 [御上洛東海道] 周磨（河鍋晩斎）画
 （望月宏充氏蔵）



「双筆五十三次 沼津」
 初代広重・三代豊国画
 （望月宏充氏蔵）



『大日本五道中図屏風』（部分）三井記念美術館蔵

三島宿

「天下の険」と唄われた箱根山を東に控える三島宿は、古来より三嶋大社（三嶋明神）の門前町として栄えてきました。また、箱根越えに一日かかることから、多くの旅人の宿泊地としても賑わいました。

宿場の規模は、『東海道宿村大概帳』によれば、本陣2軒、脇本陣3軒、旅籠74軒、石高2,632石となっており、石高から見れば東海道では3番目に大きな宿場でした。また、三嶋明神を中心に、東海道、下田街道、佐野（甲州）街道が交わり、四辻のまちとして文化の伝播と交易が行われました。

江戸初期の宿域は、新町橋から大中島（現・本町）まででしたが、正徳元年（1711）西見付けであった広小路火除土手が境川東岸に運ばれ新しい見付けとなり、宿域が西へ広がり、十八町余（約2km）の間で宿場が形成されています。

宿場の名物としては河合家の発行する三嶋暦が特に有名で、本陣の暮れの付け届けとして利用されたり、また東海道のみやげとして多くの旅人にも買い求められていたようです。このほか宿場の西に位置する千貫樋は伊豆国と駿河国の境に架かる木樋で、三嶋明神（大社）と共に街道絵図などには必ず載っている名所のひとつでした。



「東海道五拾三次之内 三嶋(朝霧)」歌川広重画(三島市郷土資料館蔵)



「三島宿風俗絵屏風」(小沼満英筆)より千貫樋部分(三島信用金庫蔵)

東海道の名物

静岡県内の街道名物

慶長6年(1601)、徳川家康によって江戸を起点とした五街道(東海道、中山道、甲州道中、日光道中、奥州道中)が整備され始め、その中でもとりわけ東海道は江戸(日本橋)と京都(三条大橋)を結ぶ重要な役割を担っていました。このため、浮世絵、紀行文などにも多くの題材が取り上げられていることは既にご存知のとおりです。東海道の宿場は寛永元年(1624)で53箇所となりましたが、そのうち静岡県内には22の宿場が存在し、おなじみ歌川広重の東海道五十三次シリーズや十返舎一九の『東海道中膝栗毛』などには吉原・原・沼津・三島の各宿場をはじめ、街道の名所名物が数多く描かれております。

ここでは、江戸時代から伝わる静岡県内の街道名物を紹介していきます。



丸子宿「とろろ汁」

広重の東海道五十三次にも描かれている「とろろ汁屋」は慶長元年(1596)創業の丁字屋。芭蕉の句「梅わかな丸子の宿のとろろ汁」や東海道中膝栗毛にも登場するほど有名です。(協力：丁字屋)



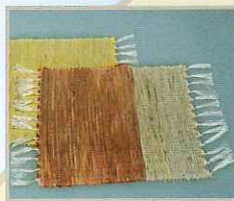
白須賀宿「勝和餅」

豊臣秀吉が天正18年(1590)小田原攻めの前に食べ、勝利し、「勝和餅」と命名。団子にソテツの餡を入れた餅であったといわれます。現在、「和田屋製パン」で製造(3月～5月)しています。(協力：和田屋製パン)



浜松宿「浜名納豆」

中国(明)の僧から伝来し、唐納豆といわれていましたが、江戸中期から「浜名納豆」と称するようになりました。豊臣秀吉、徳川家康も好みました。三ヶ日町大福寺伝製。江戸時代の食物図鑑『本朝食鑑』にも記載。(協力：大福寺)



掛川宿「葛布」

山に生ずる葛の繊維で作られる布で、丈夫で軽く通気性が良い。江戸時代には武士の衣服として使用されていました。現在では、和装小物や座布団カバーが作られています。(協力：小崎葛布工芸)



小夜の中山「子育て」

小夜の中山には、峠で盗賊に殺された母の体内から僧が子供を取りあげて、母乳のかわりに水飴を与えて養育したという話が伝わっています。この話の中で、僧が子供に与えたという水飴が子育てだといわれています。(写真提供：小泉屋)



菊川「菜飯田楽」

この地の菜飯と豆腐田楽は東海道を旅する人々の軽食として重宝され、尾張の藩士高力猿猴庵も自らの随筆の中で「此里の菜飯は世に隠れなし。名物の豆腐を小きでんがくに作十櫛余りも皿に盛りて出す。」と記しています。(写真提供：よし善)



新居宿「うなぎ」

舞阪と新居の間には浜名湖があります。今切の渡しを船で渡って新居の関所を通った弥次さん喜多さんも、浜名湖でとれた名物うなぎの蒲焼を食べています。今でも白焼うなぎなどの直売店があります。(写真提供：新居町役場)



見付宿「栗餅」

見付天神裸祭に供えられてきた新粟の栗餅。江戸時代末に土産として売られ始めました。正和年間(1312～1317)頃に祭礼の人身御供に持たせたという伝説があり、今でも祭りの時期(9月初旬)には市内各所に出回ります。(協力：井口製菓)



袋井宿「たまごふわふわ」

袋井宿の太田脇本陣の膳にのった料理で、大坂の商人が記した『仙台下向日記』や『東海道中膝栗毛』などに紹介され、東海道を旅する人々の間で評判であった料理といわれています。(写真提供：袋井市観光協会)



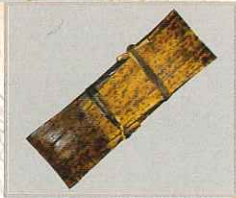
日坂宿「蕨餅」

『東街便覧図略』によると、蕨餅と言っても実は掛川の葛粉で作ったもので、塩味の豆の粉をかけて食べたとあります。手の込んだ製法で日持ちがしないため、今では注文生産を行っています。



島田宿「小饅頭」

享保年間(1716～1735)、紀州浪人の菅塩露庵から甘酒皮の饅頭づくりを伝授されたのが始まり。その後、参勤交代中の松江侯松平不昧公の助言により一口サイズの小さな形となり、街道名物に。(協力：清水屋)



江尻宿「追分羊かん」

追分羊かんは300余年の歴史を持ち、参勤交代の諸大名や江戸幕府15代将軍徳川慶喜からも臈貢にされました。竹の皮に包んで蒸されたこの羊かんは素朴な味わいで、全国に広く知られています。

(写真提供:株式会社追分羊かん)



興津宿「興津鯛」

興津沖で捕れた甘鯛を一夜干しにしたものを「興津鯛」と呼び、江戸や京都で珍重されていました。徳川家康もこれを好んだといい、「興津鯛」の命名は家康によるものともいわれています。

(写真提供:静岡市観光課)



由比宿「たまご餅」

十返舎一九の『東海道中膝栗毛』には、さとう餅やしょっぱい餅が登場します。この餅はたまご餅と名を変え、今も売られています。漣餡を上新粉の餅で包んだ素朴な白い餅。

(協力:春巻製菓)



本市場「白酒」

白酒とは、酒に糯米と米麴を仕込んで熟成させ、できた諸味をすりつぶした甘い酒です。吉原宿と蒲原宿の間宿・本市場の名物として販売され、多くの浮世絵や地誌の中に取り上げられています。



沼津宿「沼津の段」

浄瑠璃『伊賀越道中双六』には沼津の段があります。「雲助平作が命を賭して、娘およねの夫の仇の行方を尋ねたのは、なんと20年前に生き別れた平作の息子十兵衛だった。」歌舞伎でも盛んに上演される人情物の傑作です。



府中宿「安倍川餅」

安倍川上流の金山の金と大豆の黄な粉をまぶした「金な粉餅」を、徳川家康に献上したのが起源とするいい伝えがあります。現在は安倍川橋の袂に3軒の店が並びますが、明治中ごろまでは20軒ほどが営業していたといわれています。

(協力:石部屋)



岩淵「栗の粉餅」

富士川の西岸の岩淵村(現在の富士川町岩淵)では、栗の粉餅が名物として販売されていました。当初は餅に栗の粉をまぶしていたと伝えられていますが、後に黄な粉を用いたといわれています。

(写真提供:ツル家菓子店)



原宿「松蔭寺播鉢松」

多くの禅画を残し、因果応報を説いた白隠禅師(1685~1768)が大播鉢を被せた松があります。ひと抱えもある高松の梢からちらりとみえる大播鉢は、備州池田侯が白隠に贈ったといわれています。

(写真提供:ツル家菓子店)



三島宿「三嶋暦」

仮名版暦では日本最古といわれる三嶋暦は、三島宿のみやげとして有名でした。歌人香川景樹は『中空の日記』で「世に名高い三嶋暦を街道名物として求めた」と記述しています。



瀬戸「名飯」

瀬戸の名物。クチナシで黄色く染めた強飯を小判状にしたものですが、明治初期には途絶えてしまいました。平成元年に復活した染飯は、竹皮包みの黄色いおにぎり。包紙に押された壺の絵は、当時の版木を模したものです。

(協力:喜久屋)



表紙写真の所蔵者一覧

- ①ブチャーチン〔沼津市戸田造船郷土資料博物館蔵〕
- ②箱根西坂と山かこ〔三島市郷土資料館蔵〕
- ③東海道石畳〔三島市郷土資料館蔵〕
- ④白隠禅師〔鶴林山松蔭寺蔵〕
- ⑤沼津藩主水野忠成〔妙心寺福壽院蔵〕
- ⑥ラザフォード・オールコック〔横浜開港資料館蔵〕
- ⑦徳川頼宣〔南龍公神影図〕〔和歌山県立博物館蔵〕
- ⑧清水次郎長〔梅蔭寺〕
- ⑨東海道中栗毛弥次馬 原の駅〔望月宏充氏蔵〕
- ⑩大正末期の国道1号〔三島市郷土資料館蔵〕
- ⑪東海道新幹線三島駅〔三島市郷土資料館蔵〕
- ⑫松尾芭蕉〔三島市郷土資料館蔵〕
- ⑬將軍茶壺に関する文書〔三島市郷土資料館蔵〕
- ⑭山岡鉄舟〔望嶽亭藤屋蔵〕

東海道を通った朝鮮通信使

東海道が江戸と京都を結ぶ東西の幹線道路として成立して以来、数え切れないほどの多くの人びとがその道を通ってきました。そして、東海道を歩いたのは日本人だけではなく、海外から日本を訪れた人びとの姿もありました。その中でも、慶長12年(1607)から文化8年(1811)にわたって12回(このうち第2回は京都まで、第12回は対馬までのため、静岡県内は通過しなかった)、朝鮮王朝から外交使節として訪れた「朝鮮通信使」の人びとは、東海道の長い歴史の中に大きな足跡を残しました。

朝鮮通信使は、国王から将軍に宛てた親書を携えた正使や、それを補佐する副使、従事官をはじめ、朝鮮を代表する学者や絵師、さらには芸人まで含め、総勢300人から500人程で構成される大使節団でした。幕府は、日本に訪れた朝鮮通信使のための警護や荷物運びのために人を出し、使節の行列は3,000人から4,000人も規模になったといわれています。また、彼らが通過する街道沿いの住民も準備や手伝いのために動員されるなど、莫大な費用をかけた国家の一大イベントとなっていました。その行列を見るために、多くの人びとが見物に訪れ、その姿を描いた絵画や、その姿を真似た地域の祭りが現在まで残されています。



朝鮮通信使が食した料理(再現)
市毛弘子氏「朝鮮通信使が食した料理」
静岡の文化69号
(静岡県文化財団発行)より



「東海道五十三次 原」葛飾北斎画
(望月宏充氏蔵)
東海道原宿を通過する通信使の姿を
描いたもの



「青丘傾蓋集」(問宮家文書) 個人蔵
沼津市明治史料館保管
第11回の朝鮮通信使と沼津・
三島の文人との交流(漢詩の交換)を記したもの

さらに、東海道を通った朝鮮通信使の一行は、各地で休憩や宿泊をする際に、地元の住民との交流を行い、彼らが贈った絵画や額、書簡など、さまざまな形でその痕跡が残されました。江戸時代の日本は、「鎖国」という言葉によって、閉ざされた外交政策を行っていたというイメージがありますが、唯一正式な国交を結んでいた朝鮮王朝との交流を通して一般の人びとも異国の文化に触れていたということが、これらの品々の存在から明らかとなっています。